



「ひ・ふ・み・よ・橋」を巡る 「石の文化探訪」開かれる

昨年の九州北部豪雨被災地、福岡県八女市で



洗玉眼鏡橋(福岡県八女市/市指定登録文化財) 写真提供/中村まさあき
1893(明治26)年架橋、径間22.5m、橋幅5m、拱矢10m
「石の文化探訪」では星野川の「ひ・ふ・み・よ・橋」を巡り、被害の状況を確認した

昨年7月の九州北部豪雨に耐えた福岡県八女市の星野川に架かる石橋群、通称「ひ・ふ・み・よ・橋」(上流から、単アーチの洗玉眼鏡橋、2連の寄口橋、3連の大瀬橋、4連の宮ヶ原橋)を巡る「石の文化探訪」が6月2日、上陽地区まちづくりに協議会の主催で開催され、市内外から27人が参加した。

昨年8月にこれら石橋群の被害調査を行った、中村秀樹・調査研究部長と尾上一哉・総務部副部長が石橋群の案内人を務め、各橋の被害状況と基本的な修復のあり方などについて説明し、参加者からの質問に答えた。

2連アーチの寄口橋では参加者から、輪石の欠けた部分の補修方法などについて質問が寄せられると、中村氏は、欠けた部分を補修用接着剤で固め、表面を石の粉を使って仕上げる方法などを説明。

「ひ・ふ・み・よ・橋」の中で最も被害が大きかった4連アーチの宮ヶ原橋では、「昨年8月の現地調査の際は、すさまじい激流によく耐えられたものだと驚いたが、壁石の内側の構造などを見て納得できた」(中村氏)。「宮ヶ原橋をぜひ残してもらいたい。なるべく周辺の景観を損なわないよう、元の状態に

修復してもらいたい」(尾上氏)と述べた。

3連アーチの大瀬橋で尾上氏は、「見えないところもしっかり造つてあり、公共工事のお手本のような石橋」と感心。

単アーチの洗玉眼鏡橋で、中村氏は、輪石の開きを「かつて自動車が通行していた影響かもしれない。長く保存していくために詳しい調査が望まれる」。尾上氏は「この橋は肥後の石工、橋本勘五郎が棟梁として熟練の腕を振るつた素晴らしい作品。今後この橋を地元の宝として、後世に残してもらいたい」と述べた。

宮ヶ原橋は現在、架け替えの問題を抱えている状況にある。主催の協議会メンバーである久間政幸氏は、「今回の企画が石橋を守る人々の支援につながれば」と語った。

今回の企画には、本会からは河村修・総務部長と中村まさあき・広報部長も参加した。

石橋巡りの後、一行は生駒野石切り場と、八女市の伝統工芸である石灯笼(とうろう)工場を見学した。また6月30日には、「上陽の里山風景についての講演会」が開催され、約300人が参加した。

(4面に関連記事)

中面の案内

2面 第34回大会を宮崎県日南市で開催

5面 桜と石橋ツアー(末永 暢雄)

4面 福岡県八女市で石橋巡り・講演会開催

7面 I♡めがね橋(上塚 尚孝)

第34回大会を宮崎県日南市で開催

各部の活動状況を確認 堀川橋や運河を巡った

写真提供／中村まさあき



堀川橋(別名・乙姫橋) 宮崎県日南市油津／国登録有形文化財、1903(明治36)年架橋、径間22m、橋幅4m、吾平津毘売命(あびらつひめのみこと)を主祭神とする、吾平津神社(別名・乙姫神社)前の堀川運河に架かっている

第34回日本の石橋を守る大会が2013(平成25)年4月20～21日の2日間、宮崎県日南市の南郷プリンスホテルで開催され、22人の会員が参加した。

通常総会

1日目の通常総会では、地元宮崎県の贄田岳和・資料整理部長が司会を務め、まず末永暢雄・副会長が開会の挨拶を行い、地元の宮田隆雄・会員を議長に選出し議事が進行。昨年度の事業経過報告、決算・監査報告に続き、本年度の事業計画案や予算案が発表され、ともに了承された。

飯星時春・副会長の退任に伴い上塚尚孝・事務局長から、新役員人事に関する議案が提出され、理事には、学識経験者などを新たに迎えることなどが確認された。

また多忙のため、辞任を申請した中村幸史郎・景観保護部長の後任人事などが話し合われたが、結論に至らなかった。部長は空席のままであるため、上塚事務局

長がその役割を担っている。

活動報告

通常総会閉会後は、昨年度の活動報告が行われた。まず、「2012年7月九州北部豪雨」による石橋被害について、中村まさあき・広報部長、尾上一哉・総務部副部長、贄田岳和・資料整理部長がリレー形式に九州各地の被害状況を紹介した。

中村部長は、会報82号(今年3月発行)の九州北部豪雨特集取材のために訪れた、熊本県北部と福岡県八女市黒木町の石橋被害を報告。尾上副部長は、中村秀樹・調査研究部長とともに、被害を受けた同市星野川に架



活動を報告する尾上一哉・総務部副部長

総会で開催の挨拶をする末永暢雄・副会長(中央)



2013(平成25)年度

【理事】

▽甲斐利幸(会長)▽末永暢雄(副会長、資料整理部)、橋本幸一(副会長)▽上塚尚孝(事務局長、石山信次郎(事務局長補)▽井上基夫(会計)▽河村修(総務部)、尾上一哉(同)▽中村幸史郎(景観保護部)、上妻信寛(同)▽石原史彦(写真文芸部)、横田寛子(同)
▽中村秀樹(調査研究部)、軸丸英顕(同)▽贄田岳和(資料整理部)▽中村まさあき(広報部)、成田廉司(同)▽平野秀子、木原安妹子▽片寄俊秀(元会長)▽伊東孝(学識経験者)、加藤史郎(同)、



油津港の「なんごう日の出市」での抽選風景



焼酎蔵(古澤醸造)見学後の試飲の様子



屋根付き木造橋「夢見橋」



堀川運河と堀川橋

資料整理部▽九州沖縄石橋分布図への追加記入(東陽石匠館)、公式ホームページ「日本のめがね橋」一覧「都道府県別」データ追加修正作業

広報部▽「石の文化探訪」(福岡県八女市、6月2日)取材、会報編集会議、会報83号発行(8月)、会報84号発行(来年2月)、公式ホームページ「日本のめがね橋」一覧「都道府県別」など更新作業

かる通称「ひ・ふ・み・よ橋」(洗玉眼鏡橋、寄口橋、大瀬橋、宮ヶ原橋)などの現地調査の様相を報告。賛田部長は、主に大分県の石橋被害について報告した。

報告を聞いた会員は、被害を受けながらも残った石橋の強さに関心し、一方で流失や被害の傷跡にため息を漏らした。

続いて、「肥後種山石工技術継承講座」第2期の活動について、実行委員の尾上副部長が報告。1年目の講座をまとめたDVDビデオを使った座学、鹿児島市の石橋記念公園訪問、石橋の補修、新規架設、解体保存されていた石材を使った復元工

事などを、実習として行ったことなどが紹介された。

懇親会

報告会が終了すると、会場をレストランに移し、夕食を兼ねた懇親会が行われた。各自が好みのものを好みの量食べられるビュッフェ形式で、本場宮崎のチキン南蛮、地鶏焼き、カツオのたたき、ごんぐり(マグロの胃袋の炒め物)、メヒカリ(体長10センチほどの深海魚)の唐揚げ、冷や汁など、宮崎の郷土料理を味わった。

希望者が朝市へ

翌朝は海に面した大きな部屋の窓に、海から昇る太陽の光が降り注いだ。

早めに朝食を終えた希望者が、油津港で開催の朝市「なんごう日の出市」に参加。朝市は駐車場がいっぱいになるほど盛況だった。

買い物をしてもらった抽選券で、横田寛子会員に当たりが出た。長さ60センチもある立派なカツオ。そのカツオは巡り巡ってその晩、中村まさあき・広報部長の胃袋に収まった。

堀川運河・堀川橋見学

宿を発った会員一行は、日南市油津でまず焼酎の蔵を見学。その後、地元のボランティアガイドの案内で、江戸時代初期に造られた堀川

運河周辺を見て回った。

地元産「餌肥杉」を使った、屋根付きの木造橋「夢見橋(ゆめみばし)」を渡り、運河沿いの石積み護岸を巡り、石造単一アーチ橋「堀川橋」(別名・乙姫橋)を訪れた。

その後二行は、明治期から昭和初期にかけ、餌肥杉の出荷やマグロ漁などで繁栄した油津のまち並みを巡り、建造物や史跡を見て回った。

宮崎県日南市で開催された第34回大会は終了。会員一行は油津で解散した。

来年の第35回大会は、熊本県鹿市で開催されることが決まった。来年は、多くの会員の参加が望まれる。(広報部)

水田洋司(同)、小西伸彦(同)

【理事退任】

▽飯星時春(副会長)

【事業計画】

総務部▽第34回(宮崎県日南市)大会、肥後種山石工技術継承講座(第3期)

景観保護部▽「石の文化探訪」(福岡県八女市、6月2日)参加、「上陽の里山風景」についての講演会(福岡県八女市、6月30日)参加、「石橋フォーラム」(大分県宇佐市、9月21日)参加

写真文芸部▽榊晃弘「九州の眼鏡橋」展(熊本県八代市、5月)、石橋関連図書目録作り(7~8月)、石橋をテーマとした短歌・俳句作品募集

調査研究部▽熊本県の石橋の保存・管理状況と補修・補強工事の事例調査(7月県央、10月県北、来年1月県南・天草、同3月まとめ) ※現状把握と今後の管理計画、助言資料としての活用を図る

「石の文化探訪」で石橋を案内

福岡県八女市で開催された「石の文化探訪」(一面で紹介)では、星野川に架かる「ひ・ふ・み・よ橋」の案内人を、尾上一哉・総務部副部長と中村秀樹・調査研究部長が務めた。

両氏は、九州北部豪雨後の昨年8月、地元の久間一正会員から本会への依頼を受け、各橋の被害状況について現地調査を行っている。

約1年を経て、再び4橋を訪れた両氏が現場で何を感じたのか、聞いてみた。

星野川流域の景観破壊を危惧

会員 尾上一哉(熊本県)

「ひ・ふ・み・よ橋」は、公共工事のお手本。非の打ちどころがないほど丁寧に造ってある本物ばかりです。それは洪水に耐えたことで実証されました。この石橋群の価値を認め、守り抜こうとしている方々に敬意を表します。

ただ、私が惜しいと思うのは、石橋を含む河川全体が復旧工法の展示会場のようになり、これまで培われた星野川流域の文化や景観の破壊が、すでに一部で始まっていることです。

豊かな自然と質の高い景観を残すことは大事です。全体復興理念が早急に実行されることを期待しています。

写真提供 / 中村まさあき



宮ヶ原橋を案内する中村秀樹氏(右から2人目)
=福岡県八女市「石の文化探訪」、6月2日

激流に耐えた素晴らしい石橋群

会員 中村秀樹(熊本県)

昨年の九州北部豪雨の際、「ひ・ふ・み・よ橋」は、濁流の水圧や流木の激突などによく耐え抜きました。宮ヶ原橋が最も被害が大きかったのですが、流出を免れたのは、壁石内側に施された厚さ40センチほどのコンクリートと、石材間に詰められたセメントモルタルが、橋全体の強度を高めたのだと考えられます。

洪水を経験してみても、石橋は適切に維持管理すれば、何百年と耐え得ることが実証されました。

今回の企画では、先祖から受け継いだ地域の景観を後世に残したいという、住民の方々の情熱を強く感じた次第です。

上陽の里山風景についての講演会報告

会員 河村 修(熊本県)

東京大学名誉教授で土木設計家の篠原修氏を招いて、上陽の里山風景についての講演会が6月30日、福岡県八女市上陽町の八女市農業活性化センターで開催されました。主催は「ひ・ふ・み・よ橋を守る会」(久間一正会長)。

私は景観保護部の上妻信寛さんと一緒に参加。会場は集まった約300人の参加者の熱気に満ちていました。

講師の篠原教授は、里山の景観に調和する地元の朧大橋(おぼろおおはし)、2002年架橋、橋長293メートル、アーチ支間17.2メートル、土木学会田中賞・同学

会デザイン賞受賞)を設計されました。また、長崎市の中島川に架かる眼鏡橋や袋橋を洪水から守るため、増水した川の水を安全に下流に流すトンネル水路(左岸・右岸バイパス)の設計も手掛けられています。

篠原教授は「上陽への想(おもい)」という演題で講演を行われました。以下に私が印象に残ったことを紹介します。

篠原教授は朧大橋の設計に当たり、「深い谷と美しい茶畑が続く、上陽町の景観にマッチした橋を架けたい」と思い、星野川に架かる石造アーチ橋の数々を思い浮かべた」と当時の胸の内を明かされました。

星野川に架かる石橋群は、日本一の石工、橋本勘五郎の技術と、その技術を受け継いだ人たちが残した橋です。「町のシンボルでもあり町民の誇りでもある、これらの石橋に負けない橋を設計したい。そして朧大橋のそばにある小学校の児童が、学校を卒業した後も思い出に残る橋にしたい」と思われたそうです。

「景観を守っていくことは住民にとっても大事です。景観を次世代に渡すことで、親・子・孫の各世代間で『情感の共有』を図ることができるからです」との指摘が印象に残りました。



洗玉眼鏡橋で案内する尾上一哉氏(中央)
=福岡県八女市「石の文化探訪」、6月2日

桜と石橋ツアー

副会長 末永暢雄(長崎県)

写真提供/末永暢雄

長崎県では、県民にさまざまな学習の機会を提供する目的で、「ながさき県民大学主催講座(*)」が実施されている。

この主催講座として、佐世保市世知原町の「県立青少年自然の家」では5年前から、「石橋講座—石橋に触れて、渡って、その歴史を見てみよう—」が年2回開催され、私がその講師を務めている。

講座の構成は、1時間半の講義と2時間の現地案内。講義内容は、石造アーチ橋の基礎知識。現地案内では、地元佐々川流域の石橋に関するを紹介している。1回目が佐々川上流域(世知原工



八勢目鑑橋(熊本・御船町)

リア)の石橋、2回目が中流域(吉井工リア)の石橋。時間の都合もあるため、それぞれ7〜10基ほどを回る。

案内にマイクロバスを使うために、受講生の定員を各20名ほどとしているが、毎回応募がそれを上回る。定員に漏れた人々が自家用車でバスの後を付いてくる状況で、人気の講座になっている。

この講座で欠かせないのが、「肥後の石工」であり、「種山石工」のことなのである。当然、講座では通潤橋や霊台橋などの話をしている。

近年、受講者から、「お話を聞いて、通潤橋まで行ってきました」という声が聞かれるようになった。そして、その感動を伝えてくる。そこで、私は講座で「いかみんなどで一緒に行ってみましょうか」と投げかけてみたところ、すごい拍手が湧き起こった。

そうした経緯で企画をしたのが、「桜と石橋ツアー」だった。桜が満開となるころを選び、通潤橋や霊台橋などを訪れる計画を立てた。募集をかけると、さまざま反応があり、運転手を入れて16名のツアーになった。

4月5日、佐世保市を出発。長崎自動車道・川登SAでまず、上り線SA内にある「越川橋」(桁橋)を見学。そして九州自動車道・御船ICで高速を降り、熊本・御船町の「八勢目鑑橋」へ。
今年には桜の開花が10日も早かった



大窪橋(熊本・美里町)

め、橋の周辺の桜は散っていたが、絨毯のように散り積もった花びらにえらく感動しながら見学できた。

次は美里町に行き、「二俣橋」を見学。その不思議なつくりを方々から眺め、感激。「大窪橋」では反り返った橋に喜び、「霊台橋」ではその大きな半円に感嘆を漏らした。

その後、山都町の「通潤橋」へ向かった。翌日は雨という天気予報を受け、宿の通潤山荘に着くなり、近くにある「通潤橋」を渡ることになった。中央部で、恐る恐る下を覗き込んだ参加者から、悲鳴に似た声が出た。

通潤山荘では、夕食の料理に舌鼓を打ち、温泉でゆっくりした次の日は、白糸大地を眺めることにした。そのために、「鮎瀬大橋」まで車で走り、それから、

潤用水の取水口そばにある「円形分水」を訪ね、通潤橋の役割と通潤水工事の規模の大きさを参加者に実感してもらった。

そして、正午の放水を楽しんでもらうと、通潤橋に戻った。さすがに人気の放水。肌を冷たいしぶきを受けながら橋を見上げた。放水終了後は、通潤橋史料館でジオラマを見ながら、石山信次郎館長の分かりやすい説明を受けた。

佐世保市へ帰る車中は、クイズあり歌ありで盛り上がり、早速、次の計画が持ち上がった。「紅葉と石橋ツアー」である。11月2・3日に大分県九重町を訪れる。

各県で会員が中心となり、こうした催しが生まれるといいなと思っている。

※「ながさき県民大学主催講座は、市町・県・大学や短大・公益法人・社会教育団体・NPO法人等の実施機関と長崎県教育委員会との共催事業



通潤橋史料館で説明する石山信次郎館長(左から2人目)

発見・確認！ 全国各地の石造アーチ橋を巡る
贅田岳和・宮川康夫会員。詳細はWebで確認を！



下高尾野湧水公園の石橋
鹿児島県出水市高尾野町下高尾野
径間1.86㍍、橋幅1.9㍍、
拱矢0.7㍍、環厚30㍍、輪石9列



中郷の太鼓橋
鹿児島県薩摩川内市中郷町
径間4.23㍍、橋幅2.75㍍、
拱矢0.93㍍、環厚43㍍、輪石14列



石原橋
大分県豊後大野市清川町六種
径間1.82㍍、橋幅1.8㍍、
拱矢1.0㍍、環厚33㍍、輪石13列
下流左岸側基礎高0.8㍍、右岸側は岩着

贅田岳和会員作成・大会資料より(2013年4月20日時点)

ホームページは「贅田岳和」で検索 <http://niemon.travel-way.net/>

写真提供 / 贅田岳和



旧池田氏庭園眼鏡橋(仮称)
秋田県大仙市高梨大嶋1
秋田県唯一の石橋。旧池田氏庭園の
入口にある



岩手刈屋倉ノ沢水路橋(仮称)
岩手県宮古市刈屋
岩手県唯一の石橋。山奥の目立た
ない場所にある



小滝沢橋
宮城県仙台市太白区秋保町馬場
仙台市指定登録文化財。宮城県では
3基だけ確認。3基とも見事な石橋

宮川康夫会員作成・大会資料より(2013年4月20日時点)

ホームページは「宮様の石橋」で検索 <http://18.photo-web.cc/~miyasama2748/>

写真提供 / 宮川康夫

鍛冶屋自然石橋

会員 平野秀子(熊本県)

熊本城下に至ります。

昔はこの谷の道を、
多くの人や

荷物を運ぶ馬や牛が往来して
とても賑わったようです。

橋は、ただ渡るためのものではなく
人々の生活の一部となっていました。

「橋に託された、とてもない思い」

その思いが伝わってきて

胸に染み込み、

不思議な感覚を覚えました。

「ありがたい」

勘五郎の知恵と技が、

巧みに組み合わさった作品

「鍛冶屋自然石橋」

きつとまだ、

橋にはたくさんのお話が

込められていて、

メッセージを発信している。

だから、

目が離せない。

石橋は、生きている。

生きているのです。

(2013年4月25日)

※鍛冶屋自然石橋は橋本勘五郎が最晩年、自然石
だけを使って自宅近くの川に架けた橋。2007
年7月14日の記録的な豪雨により流失した。

谷の道を南に行くと薩摩。
北に行くと小川(熊本県宇城市)を経て

食べ物が一番必要とされた時代に
米や野菜を橋の上で作ったなんて…。

「さすが、勘五郎」

今までない感動を覚えました。

私は胸がドキドキして

それを聞いて、

米や野菜を作っていたそうです。

橋の上で、

石橋は昔、もっともつと幅があり、

奥さまの房子さんのお話では、

橋本脩成さんと

その橋のそばに住む勘五郎の子孫、

架けられてから、ずいぶん月日がたつて
いるのが分かりました。

私の好きな橋でした。

耐えていた石の橋

からうじて

横の大きな杉の木の根元で、

鍛冶屋谷に架かる5つの橋の1つ。

とてもとても小さな石橋がありました。

自然石だけで積み上げられた

東陽石匠館(熊本県八代市)の横に、

東陽石匠館(熊本県八代市)の横に、

熊本・大分の石造アーチ橋架設ブームを考える

九州・沖縄の石造アーチ橋分布図を会員有志の協力を得て3年前に作成した。それを東陽石匠館の来館者に披露しながら、大陸からの石造文化が九州に定着したことを説明している。

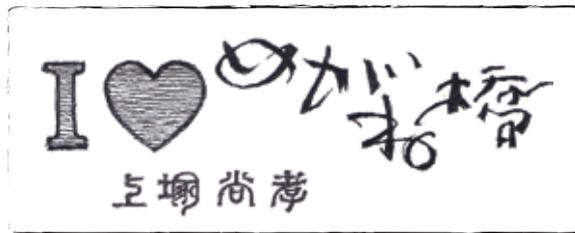
一目瞭然の分布図を見た来館者の反応は、「大分は石橋が多いですね」、「鹿児島にもたくさんありますね」と印象を漏らします。ところが熊本県人は、「熊本が一番多いと聞いていましたが…」と不満な表情。

それならと、熊本県と大分県の石造アーチ橋架設年を比較するグラフを作成してみた。するとその数は、江戸時代の後半に熊本は100基を軽く超えたが、大分は僅少。この大きな差の理由は何だろうか。

まず肥後・熊本藩について調べてみると、1750年代の「宝暦の改革」以降、土木事業は「地域のことは地域に任せろ」という政策に沿って、地方自治の地元責任者である惣庄屋が事業主となり、道路、水路、溜め池などの整備を推進した。費用は地域有力者からの献金「寸志」に頼ったが、当初は集まりが悪かったようだ。

1803年に藩は、「請免制(うけめんせい)」を導入し年貢率を下げた。これが効力を発揮するようになると、寸志が集

まるようになり、惣庄屋が管理する財源「会所官銭(かいしよかんせん)」を併せて、事業が推進されるようになった。結果的に江戸時代後半に、肥後で石造アーチ橋架設ブームが起こった。なお、相良氏の領地であった肥後の人吉・球磨



地方と天領だった天草地方は、架設ブームとは無縁であった。一方の大分では、同時代、石橋架設が多くなかった理由について、当地の岡崎文雄会員に尋ねてみたところ、「藩政期の

大分は、小藩分立と他藩の飛び地に分割されていた状態だったためと考えられます」との返答があった。明治期の後半から大正期、昭和初期にかけて、大分では爆発的な石造アーチ橋架設ブームが起き、現存数を見ると、熊本を追い抜いた。

岡崎会員は、「大分県で幹線道路の改築が始まったのは、明治20年代からで、

国道の門司―大分線から始まり、大分―宮崎線、さらに大分―佐賀県道整備が進められ、当時、永久橋として採用されたのが石造アーチ橋でした。また、「幹線道路から外れた枝線(しせん)にも石橋が架設されていった。架設費用は地元が負担し、新しい工法の架橋技術が県内一円に広まった」と見ている。

明治期以降の熊本は、江戸時代後半ほ



左は、熊本県上益城郡山都町の通潤橋(1854=嘉永7年架橋) 写真提供/上塚尚孝
右は、大分県竹田市の明正井路第一拱石橋(1919=大正8年架橋) 写真提供/中村まさあき

どのペースではなかったものの、石造アーチ橋の架設は着実に伸び、昭和32年に終幕した。

さて、両県の石造アーチ橋を見比べてみよう。熊本藩時代は、比較的大きな雑割石(ぎつわりいし)を空(から)積みにして建造したものが多く、石材の並びはやや不ぞろいである。大分は一回り小さな成形石材をセメント充填工法で建造し、石材の並びが水平で行儀の良い布積みがほとんど。

熊本に残る石造アーチ橋の方は、職人がその技量を発揮する余地が多かったようだ。一方の大分では、石材や工法を規格化することで、石造アーチ橋の量産がなされた時代に多く架けられたと見てよからう。

両県の石造アーチ橋の類似点は、用材である。何万年も昔に阿蘇が大噴火し、噴出した火砕流堆積物が溶結凝灰岩となった。これは加工に適しており、石工に重宝がられた。

溶結凝灰岩は加工しやすいが、硬度が低いわけで、負荷が掛かると割れやすい。そこで両県の石工は、短く加工した石材を壁面に積み、並べる工夫をしたようである。

こんな話題をヒントに見てもらおうと、興味は倍加して、関心も高まりそうに思えるが、いかがだろうか…。

(2012年9月9日)



荒瀬橋(大分県宇佐市院内町)
1913(大正2)年架橋、市指定有形文化財
写真提供/中村まさあき

石橋フォーラム in いんない

日時/9月21日(土)
14:00~16:30

場所/宇佐市平成の森公園
院内農村交流ホール
大分県宇佐市院内町原口 146-1

◇講演

岡崎文雄(元・大分の石橋を守る会会長)

◇フォーラム

「石橋の保存とまちづくり」

岡崎文雄

桜井成昭(大分県立歴史博物館学芸員)

上塚尚孝(熊本県・東陽石匠館館長)

高野弘之(豊後大野市歴史民俗資料館)

向野 茂(宇佐市院内町在住)

【問い合わせ先】

宇佐市観光まちづくり課

☎代表 0978(32)1111

内線 477 時枝(ときえだ)さん

「石橋フォーラム in いんない」が、大分県宇佐市院内町で9月21日に開催される。大分県在住の岡崎文雄会員が講演を行い、フォーラムには上塚尚孝・事務局長も加わる。院内町には現在も、見事な石橋が数多く残っている。石橋の保存とまちづくりについて考えてみる、良い機会になるだろう。

「石橋フォーラム in いんない」9月21日に大分・院内町で



片寄 俊秀「驚異の扁平アーチ石橋」 鹿児島県種子島町西之表

近年とみに名高い「安納(あんのう)いも」(*1)のふるさとを訪ねて。生産者の西田春樹さんを訪ねた。
私は石橋保全活動に熱中した長崎市から1995年、関西に舞い戻った。そして、公書で傷んだ兵庫県尼崎市で、まち再生のシンボル「尼いも」(*2)の復活を目指す、まちづくり活動に参加している。サツマイモはいまや、最先端の食品であるようだ。中でも人気の

石橋のふる風

高いベチャ甘系の「安納いも」は、技術の進歩により、収穫したものを半年ほど寝かすことに成功している。そのおかげで一段と甘味が強いものになり、出荷期間を長くすることができるようになった。

建設業から転身した西田さんが、「安納いも」を一定温度で保存する巨大な石室を築いたと聞き、私はそれを見学に行つて、扁平な石橋を発見した!

「支保工の代わりに土を盛り、その上に石を並べ、土を取り去つただけ」と西田さんは、こともなげに話される。完成後に橋上をコンボで通つたという。

扁平な石橋では熊本県の美里町(旧・砥用町)の舞鹿野田橋(もつかんだばし)が名高いが、それを超える扁平さに感動した。(片寄俊秀、水彩画)

*1 「安納いも」は、種子島の芋を代表するサツマイモ。栽培が難しいため収穫量が多くないといわれる。

*2 「尼いも」は、1934(昭和9)年の室戸台風で被害を受けるまで、兵庫県尼崎市辺りで栽培されていた。



石橋は2009年に建造、径間約3尺、橋幅約2.5尺、拱矢0.2尺。
上写真右の人物が西田春樹氏、左が筆者
写真提供/片寄俊秀

編集後記

福岡県八女市では、昨年の九州北部豪雨で損傷した「ひ・ふ・み・よ橋」の修復と保存に向けた動きが始まりました。その一方で、4連アーチの「宮ヶ原橋」は架け替え問題を抱えています。また82号で紹介した、大分県中津市の「馬溪橋」は、架け替えを含め、今後どうするかを判断するための市の調査が始まっているようです(7月16日・西日本新聞より)。
昨年の豪雨は、これまでの観測記録を更新するほどのものでした。果たして人間は、自然を完全な管理下に置けるのでしょうか。川とともに生きた先人たちの防災の知恵に学ぶ一方で、耐久性の高い石橋を大事に、長く使う工夫はないものでしょうか。(会報担当 中村まさあき)

日本の石橋を守る会

～石橋とその文化を大切に～

会報83号(通算) 2013(平成25)年8月10日発行

代表者 会長 甲斐 利幸

事務局 〒861-3513 熊本県上益城郡山都町下市182-2

通潤橋史料館内 ☎0967(72)3360

HP <http://www.ishibashi-mamorukai.jp>

BBS <http://9328.teacup.com/jsbp/bbs/>